

国語

(解答番号

1

 ～

37

)

※国語は「経済経営学部」「人文学部」および「健康医療学部」は必須。
「バイオ環境学部」は選択。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

民俗学とはいかなる学問であるか、あらためて最低限の確認をしておこう。やや煩瑣^{はんさ}で面白みに欠けるかもしれないが、学問としては必要な手続きである。なお、初学者にとって端折^{はしよ}れそうな部分は最大限割愛して話を進めることとする。

一般に、学問分野はその対象によって定義づけられると思われる。経済を対象とするのが経済学、物理を対象とするのが物理学というわけだ。だが、これは必要条件であって十分条件ではない。(i)、『万葉集』という歌集があるが、これを古代和歌として研究するなら日本文学だが、古代日本語として研究すれば日本語学、歌謡の内容から古代社会を研究するなら日本史学となる。このように、学問分野はその対象だけでは決まらない。どんな目的で、どんな対象を、どんな方法で研究するのか、その相関関係が学問分野を決定するのだ。(ii)、民俗学は民俗を研究する学問だ、というだけでは——「民俗とは何か」という問題を差し当たり不問にするとしても——なお不十分であり、何のため、どのような方法で民俗を研究するのか、その相関こそが問われなければならない。

まず、民俗学の目的は何か。普通の人々の日々の暮らし、それが現在に至った来歴を解き明かすことである、というのが日本民俗学の創始者・柳田國男の考えである。世の中をより良く改めるには、現状がいかにして産み出され、問題点がどこにあるかを踏まえることが不可欠であり、その認識なくしては改良することもおぼつかない。未来をより良くするために現在とそれを生み出した過去を正しく知ること。それが、「経世済民」——世を経め民を済^{すく}う——を掲げた柳田民俗学^Aの企図なのだ。

なお、柳田その人は学問が世のため人のために役立つものであるべきことを毫^こも疑わなかったが、実のところ、役立てようとした研究が本当に役に立つとは限らない。有用を意図しなかった研究が結果的に役立った事例は科学史上無数にある。役に立つ研究を忘^{わす}れることが間違^{まちが}いとはいわないが、役に立たない研究が必ずしも悪いわけでもない。そういった役に立つ／立たないという区分をイッタン^a棚上げして、事実と論理の前に跪^{ひざまず}いてみる。そうやって、森羅万象(universe)に対する普遍的な(universal)知識を生産し、公開し、更新し、蓄積する。そのことを通じて、結果¹的に一定の確率で「役に立つ知識」を提供することが、「制度」としての「大

学 university」ないし学問の存在意義であると筆者は思っている（吉見俊哉『大学とは何か』も参照）。

話を民俗学の目的に戻すと、「これからをより良くするために、これまでをより良く知る」という目的は、大方の賛同を得られるところかと思う。というよりも、これは歴史科学一般、さらには人文・社会科学一般に当てはまりそうな課題設定であり、逆にいうと、このレベルで民俗学の独自性はほとんどないようにも見える。そうなのだ。民俗学がユニークなのは目的そのものではない。この課題に対する「対象」と「方法」の設定にあるのだ。

「普通の人々」の「日々の暮らし」、その来し方行く末を考えるのが民俗学の目的だとして、それはどのような対象に^よ拠るべきだろうか。

試みに、いま、ここに生きている私たちの日々の暮らしが、一〇〇年後にどのような形で残されているのか、想像してみよう。まず、私たち自身が書き残した文字、私たちをめぐって書き記された文字（戸籍や成績表や源泉徴収票やら）が一〇〇年後も残っているというのは十分にありそうなことである。未来に伝えられる資料として、文字（記号）は第一に推すべきものだ。

だが、それだけではない。私たちが使っている道具、施設といったモノも、私たちの生活を後世に伝える手がかりとなる。ほかにも、人々のノウリ^{ボリ}に刻み込まれた記憶も、一〇〇年後に伝わるかもしれない。たとえ一人の人間が直接伝えることが困難でも、親から子へ、子から孫へと世代を超えて受け継がれ、後の世に伝えることが可能である。

まとめると、時を超えて伝わる資料は、文字（記号）、モノ、（身体的）記憶の三種に大別できる（そして、この三種の記録の一部分あるいは一側面は、テクノロジーによってデジタル情報に変換され、デジタル固有の強度と脆弱性^{ぜいじやくせい}を持つことも可能であるが、その問題はひとまず措いておく）。さらに先を急ぐと、文字（記号）を扱うのが文献史学（歴史学）、モノを扱うのが考古学、（身体的）記憶を扱うのが民俗学、ということもできる。

さてそれでは、さまざまな資料のうち、「普通の人々」の「日々の暮らし」を考えるのにふさわしいのはどれか、ということが問題となる。通常、歴史を調べる際に用いられるのは、史料すなわち文字資料だろう。なるほど文字資料は、文字を読むことで過去の出来事を知ることができ、しかも、往々にして年月日まで記され、過去を知るにはすこぶる便利な素材である。歴史学が実質的に文献史学すなわち文字資料の学であることも、故なきことではない。

だが、本当にそれだけで良いのか。そこから「普通の人々」の「日々の暮らし」を辿ることが出来るのか、というのがここでの問いだ。そして柳田國男は、これに「否」と答えたのである。

「愛すべきわが邦の農民の歴史を、ただ一揆^い・^{*}騒^{うら}訴^そと風水虫害等の連続のことくしてしまつたのは、遠慮なく言うならば記録文書主義の罪である」(『国史と民俗学』一九四四)。柳田はそうカツペした。「天災に苦しみ、一揆に荒れ狂う」という農民像は、あくまで文字資料の産物に過ぎない。なぜか。文字は、リテラシーすなわち文字を読み書きする能力のある者のみが残せる資料であり、その能力は時代を遡れば遡るほど「特別な人々」に限られていく。(iii)、書き記される内容は、当たり前に繰り返される「日々の暮らし」よりも、書き残そうとする意志のはたらく「特別な出来事」に傾いていく。

農民像に即していうと、近世の農民について書き残すのは読み書き能力を有する支配階層がほとんどで、彼らにとって最大の関心は年貢がきちんと上がってくることで、もし何かアクシデントが生ずると、やれ「一揆騒訴」だ「風水虫害」だと、大慌てで収入の危機を文字に記すこととなる。こうして残された文字資料から、「天災に苦しみ、一揆に荒れ狂う」農民像が出来上がる。しかしそれは、文字資料というフィルターを通した近世農民の一側面に過ぎず、その全体像ではない。なるほど文字は便利ではあるが、「特別な人々」による「特別な出来事」の記録という本質的制約をはらみ、ゆえに「普通の人々」の「日々の暮らし」を解き明かすリソースとしては、不完全といわざるをえないのだ。

誤解のないように付け加えておくと、こうした柳田の史学批判は、その後、文献史学においても真摯に受け止められることとなった。近世農民についていえば、多様な文献資料の多角的な読解から歴史的美態の解明が進み、「一揆騒訴」と「風水虫害」にシロウシする農民像は、もはや過去のものといって良い。こうした文献史学の進展は、民俗学にとつても喜ぶべきことであり、かつ、その進展にどう応えていくのか、民俗学の側のさらなる工夫が求められるところだ。

(iv)、文字資料の原理的な制約は制約として残り続ける。この点を踏まえて話を進めよう。

「文字資料」だけに頼ることは限界がある。ならば、その限界を突破するために、新たな資料の分野が切り拓かれなければならないまい。ここで見いだされたのが「民俗資料」である。それは何か。「普通の人々」の「日々の暮らし」そのものであり、極論すれば、そうした暮らしを営む私

(たち) 自身のことだ。

なにゆえ私たちが「資料」なのか。順を追って説明しよう。私たちは「日々の暮らし」を営んでいる。この日常生活は、無数の作法の組み合わせで出来上がっている。朝起きて、顔を洗って、歯をみがいて服を着る。こうした一連のふるまいは生物学的本能ではなく、後天的学習によって獲得される。しかも、こうした所作は、いま現在の行為でありながら、確実に「歴史的深度」を有している。たとえば、「箸を使う」という日々繰り返す当たり前の所作も、決して今この瞬間に自ら発明したものではなく、周囲の年長者たちに教えられたものであり、その年長者たちもそのまた年長者たちに教えられたものであり、という具合に、はるか以前に遡ることができる。言葉もそうだ。私たちは、いまこの瞬間に語りながらも、その大部分は自分ではない過去の人々が作り、使い、伝えてきたものだ。このように、私たちの日々のふるまいは、いま現在の出来事でありながら、本当に自らの発明発見である部分はいくわずか、その大部分を過去の人々に依拠している。私たち自身が「歴史」を宿した「資料」であるというのは、このような意味においてのことだ。

誤解を恐れずに例えるなら、^{IV}私たちは、無数のアプリをインストールされたスマホのようなもの、といえるのかもしれない。無数のアプリが起動するスマホのように、私たちは様々なふるまいが出来るわけだが、その大半は外部からインストールされたアプリのようなものはたらきなのであり、そしてそのインストールという操作を通じて、必ず「歴史」とつながっているのだ。

ここで厄介なのが、私たちに「歴史」が刻み込まれているというのは良いとして、その「歴史」を一体どうやって引き出すのか、という難題である。なんとすれば、私たちに「歴史」が刻み込まれているが、そのふるまいはどこまでも「現在」に属しているからだ。これがスマホならアプリの製造元に問い合わせれば済む話だが、残念ながら私たちに刻み込まれた「歴史」は、製造元も製造時期も不透明きわまりない。さて、どうしたものだろう。

柳田國男は、その読み解きの可能性を『蝸牛考』(一九三〇)で鮮やかに提示した。「蝸牛」とは、「デンデンムシムシ、カタツムリ」のカタツムリのこと。柳田は、このカタツムリを何と呼ぶか、全国各地の報告を取り集めて検討した。その結果、歴史的に日本文化の中心である京都とその周辺では「デンデンムシ(デデムシ)」が主流だが、東西にやや離れていくと「マイマイ」が、さらに離れていくと「カタツムリ」が、さらに離れていくと「ツブリ」が、最後に、東

北の端と南西の端にいくと「ナメクジ」が用いられている、という分布傾向を見出した。そして柳田はいう。「若し日本が此様な細長い島で無かったら、方言は大凡近畿をぶんまわし[コンパス]の中心として、段々に幾つかの圏を描いたことであろう」(『蝸牛考(二)』一九二七)。カタツムリの方言分布は、京都を中心とした同心円と見なしうるわけであり、そこから、水の波紋が中心から周辺へ広がっていく様になぞらえ、中心部がより新しく、周辺がより古いという時代差を読み取ることが可能となる。^{vi}空間的差異から時間的推移を捉えることも不可能ではないわけだ。

(　　v　　)、早くも補足しておく、このような「きれいな」同心円分布が見いだされるケースは実際には稀であり、カタツムリの方言分布それ自体も異論の余地がある。とはいえ、「ある事象の分布はその歴史を反映している」というテーゼは、認めておいて差し支えないだろう。

「民俗資料」は、それ自体はどこまでも「現在」に属するものでありながら、必ず「歴史」が刻み込まれており、そして、その「歴史」は単体からは不可視だが、大量の比較を通じて空間差から時間差を抽出することが可能となる。ここに、「特別な人々」の「特別な出来事」の記録たる文字資料の不完全性をホカンし得る。^{vii}「普通の人々」の「日々の暮らし」そのものである「民俗資料」、すなわち、「私(たち)」という資料」の可能性が立ち上がるわけだ。

(2022 菊地暁『民俗学入門』より 岩波書店)

* 敷訴…強訴。徒党を組んで上位者に訴え出ること。

問一 文中の傍線部 a ～ e に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

1

 ～

5

。

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a | イ | ッ | タ | ン | { | ① | タン | パ | ツ | の | ア | ル | バ | イ | ト |
| | | | | | | ② | ガ | ン | タ | ン | の | 行 | 事 | | |
| | | | | | | ③ | イ | タ | ン | と | さ | れ | る | 説 | |
| | | | | | | ④ | ブ | ン | タ | ン | 作 | 業 | | | |
| | | | | | | ⑤ | 何 | か | コ | ン | タ | ン | が | あ | り |
| | | | | | | | そ | う | だ | | | | | | |

b ノウリ

2

① ゴリムチュウ

② ヒミツリの交渉

③ ヘクリタバイ

④ 会計カンリのソフト

⑤ シリメツレッ

c カツ

3

① カツセイタンでろ過する

② イツカツで返済する

③ カツソウロから離陸する

④ キョウカツ罪で逮捕する

⑤ ブンカツ払い

d シュウシ

4

① シマツシヨを書かされる

② ヨクシリヨクになる

③ ジョウシからのメール

④ シサを請う

⑤ 論文のヨウシを読む

e ホカン

5

① ホニエウ動物

② 態度をホリエウする

③ 互いにジョウホする

④ ホゲイ船

⑤ 市長にリツコウホする

問二 傍線部 A ～ E の語の文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、6 ～ 10。

A 企画

6

① 目的を果たすための他には見られない独特のアプローチ

② 目的達成までの最も効率的な近道

③ 目的が果たせるように力を尽くすための見通し

④ 目的を達成するための本末転倒に見えるやり方

⑤ 目的が「人の役に立つこと」である様々な計画

(次頁に続きます)

B

真摯に

7

- ① 以前の考えをすっかり変えて
- ② 礼儀正しく上品な態度で
- ③ 謙虚に他者を尊重して
- ④ 攻撃的な態度を改めて
- ⑤ まじめに心に向けて

C

沃野

8

- ① 前人未到の地
- ② 豊かな領域
- ③ 他分野への侵犯
- ④ 開発中の土壌
- ⑤ 収穫を増やす野心

D

所作

9

- ① 何かをするための前置き
- ② 何かをするための規則
- ③ 何かをするための動き
- ④ 何かをした成果として作り出されたもの
- ⑤ 何かをしたことによつて副次的に生まれたもの

E

厄介

10

- ① 面倒をみてもらうこと
- ② 手間がかかつて面倒なこと
- ③ 思わぬところに面倒がかかること
- ④ 面倒を予想しておかねばならないこと
- ⑤ 誰かの面倒をみること

問三 空欄（ i ）と（ v ）に入る最も適当な語を、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、（ i ）が **11**、（ ii ）が **12**、（ iii ）が **13**、（ iv ）が **14**、（ v ）が **15**。

11 （ i ）

- ① ところが ② ましてや ③ たとえば ④ それに ⑤ そもそも

12 （ ii ）

- ① むしろ ② とはいえ ③ あるいは ④ もしかしたら ⑤ ということとは

13 （ iii ）

- ① しかも ② もし ③ だが ④ たとえば ⑤ なぜなら

14 （ iv ）

- ① かえって ② とはいえ ③ しかも ④ もしくは ⑤ それゆえ

15 （ v ）

- ① たとえば ② さて ③ ともしれば ④ なぜなら ⑤ ただし

問四 傍線部 I 『制度』としての『大学 university』ないし学問の存在意義」を筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、**16**。

- ① 人の役に立つことを目指してなされる、ありとあらゆるものに対する研究が、一定の割合で成功して、人にとって有用なものとなること

（次頁に続きます）

- ② 人の役に立つことを棚上げして行われる、ありとあらゆるものについての研究の中から、結果的に役に立つものだけを選び出して提供すること
- ③ ありとあらゆるものを知識の体系に組み込む作業を行う中で、万人にとはいかないまでも、一定の割合の人にとって役に立つものが生み出されること
- ④ 人の役に立たなければ研究の価値はないが、人の役に立つものを見つけ出すために、多くの役に立たない研究が必要だということ
- ⑤ ありとあらゆるものについて、それにあてはまる知識をつくりだして扱うという営為の中から、時に人の役に立つものが出てくること

問五 傍線部Ⅱ『普通の人々』の『日々の暮らし』を解き明かすリソースとしては、不完全といわざるをえない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。
解答番号は、

17

。

- ① 一揆、嗟訴や風水虫害等の連続について、年月日までが詳しく記されることはあまりないから、正確な情報が足りないから
- ② 日々の暮らしの中には、道具や施設といったモノや、身体的記憶のように文字資料の残せないものもたくさんあるから
- ③ 時代を遡るほど普通の人々には文字を読み書きする能力がなく、書き残されるのは特別な人にとって重要なことに限られるから
- ④ 近世農民について、これまで多様な文献資料を用いた多角的な読解が行われず、天災に苦しみ一揆に荒れ狂う農民像だけを強化してきたから
- ⑤ リテラシーがあるのは支配階層の特別な人であり、支配階層が書き残すのは、年貢に関わる一揆、嗟訴や風水虫害等に限られるから

問六 傍線部Ⅲ「文字資料の原理的な制約」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

18

。

- ① モノや、身体的記憶は客観的に記述できないということ
- ② フィルターを通した農民像しか書き残されないということ
- ③ 特別な人々にとって都合の良いことしか書き残されないということ
- ④ リテラシーのある人しか書き残せないということ
- ⑤ 多様な文献資料の多角的な読解が昔は行われていなかったということ

問七 傍線部Ⅳ「私たちは、無数のアプリをインストールされたスマホのようなもの、といえるのかもしれない」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。
解答番号は、

19

。

- ① 通常スマホは目的に応じたアプリをインストールしなければ機能しないが、それと同様に、私たちは、さまざまな知識を目的に応じて獲得することによって人間らしく生きていくことができるようになるということ
- ② 私たちが行うふるまいの多くは、後天的学習によって獲得されたアプリのようなもので、スマホからアプリをアンインストールできるのと同様に、身体的ふるまいは永久的なものではないということ
- ③ 私たちは、生まれたばかりの時、身体的能力が極めて低く、ふるまいの大部分は年齢とともに徐々に可能になってくるものであるが、それは買ったばかりのからっぽのスマホに、様々なアプリをインストールして使えるようにするのに似ているということ
- ④ スマホに様々な動作を実行させるためには、目的に応じたアプリをインストールする必要があるように、私たちは、歴史的深度を有する多くのふるまいを、後天的学習によって獲得した上で行っているということ
- ⑤ スマホにインストールするアプリが、自分自身で発明発見したものでないのと同様に、私たちが有する身体的機能は自分自身で獲得したものではなく、生物的に親から引き継がれたものであるということ

問八 傍線部Ⅴ「ふるまいはどこまでも『現在』に属している」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、20。

- ① 歴史というからには、何らかの形で記録されなければならないが、ふるまいというのは「現在」のその場限りで痕跡を残さないということ
- ② 実際にふるまいが行われるのは「現在」という時間においてであり、ふるまいを見て直接その来歴を知る方法はないということ
- ③ ふるまいを実行するのは常に「現在」という時間に属する人であり、過去の人のふるまいと同じかどうかを確認することはできないということ
- ④ いつ、どこで、誰が始めたかという歴史にとって大事なことが、ふるまいにはさほど重要でなく、ただ「現在」のふるまいであることに意味があるということ
- ⑤ 「現在」という時間に属する人が実行するふるまいは、飽くまでも現在のふるまいであり、歴史と関連付けることはできないということ

問九 傍線部Ⅵ「空間的差異から時間的推移を捉えることも不可能ではない」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、21。

- ① 同時代同時期に属しているものでも、それがどこにあるかによつて過去の時代時期と関連させることができるということ
- ② 中心部がより新しく、周辺がより古いという定義さえ決めておけば、位置情報から時期を割り出すことができるということ
- ③ 平面的には同じ場所であっても、立体的に見れば、深部へ行くほど古い時代に属するものが残っているということ
- ④ 現在における分布状況を調べることによつて、その発信源がどこであるかをある程度推測することができるということ
- ⑤ 日本列島は細長く、地域ごとの方言が豊富なので、地域に残る文献を調べることで歴史を知ることができるということ

問十 傍線部Ⅶ『普通の人々』の『日々の暮らし』そのものである『民俗資料』、すなわち、『私（たち）という資料』の可能性が立ち上がる」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、22。

- ① 普通の人（々）である私（たち）の暮らしと未来をより良くするためには、まずは私（たち）自身が資料となつてふるまいを分析されなければならないということ
- ② 普通の人（々）である私（たち）のふるまいを知ることから始めて、過去にさかのぼっていけば発信源に行きつくはずなので、まず私（たち）自身が資料になるということ
- ③ 普通の人（々）である私（たち）は「民俗」そのものでありながら、文献に登場しない存在なので、私（たち）自身で資料となるふるまいの記録を書き残すべきだということ
- ④ 普通の人（々）である私（たち）自身が資料となつてふるまいのデータを提供することで、大量のデータ比較が必要になる民俗学の発展の一助となるということ
- ⑤ 普通の人（々）である私（たち）の日々のふるまいには、目には見えなくても必ず歴史が含まれているのだから、私（たち）自身が資料そのものであるということ

二

次の問一～問三に答えなさい。

問一 次のA～Eの熟語と、二文字の意味の構成の仕方が異なっているものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、23～27。

23

A 授業 ①技術 ②造船 ③看病 ④喫茶 ⑤消臭

24

B 移動 ①表示 ②創造 ③希望 ④製作 ⑤登校

（次頁に続きます）

25 C 苦楽 ①新旧 ②寒暖 ③膨大 ④悲喜 ⑤遠近

26 D 最後 ①粗品 ②書写 ③名医 ④清流 ⑤活気

27 E 楽観 ①強行 ②平伏 ③巡回 ④和解 ⑤豪遊

問二 次のA～Eの慣用的表現の（ ）に入れるものとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、28 ～ 32。

28 A 白羽の矢が（ ）

- ① 当たる ② 飛ぶ ③ 放たれる ④ 立つ ⑤ 刺さる

29 B 後塵^{こうじん}を（ ）

- ① 浴する ② 拝する ③ 献ずる ④ 被る ⑤ 目する

30 C 火に油を（ ）

- ① つける ② 売る ③ かける ④ しぼる ⑤ そそぐ

31 D 馬の背を（ ）

- ① そろえる ② わける ③ 合わせる ④ たたく ⑤ 追う

32 E 犬（ ）の仲

- ① 猫 ② 鶏 ③ 猿 ④ 虎 ⑤ 牛

問三 次のコラムは、▼を付した最初と最後の段落以外は順序が正しくありません。これを読んで、後の問いに答えなさい。

▶ スマホの画面をのぞきながら足早に、夜道を家路につく。ふと見上げると、すばらしい輝きの満月が浮いていた。つい先日のことだ。現代社会は、夜空を見つめる機会をすっかり失わせてしまった。せめて今夜ぐらい。七夕である。

① 万葉集の名もなき歌人も、天を見上げて銀の粒を恨めしげに眺めたのだろう。そして想像力をふくらませた。〈この夕^{ゆふ}降り来る雨は彦星のはや漕^こぐ船の櫂^{かい}の散りかも〉。銀河をこぎ渡る彦星の舟。そのときに飛び散るしぶきに、雨を例えた。

② さて今年はいかに。きのう各地では梅雨の晴れ間が広がり、真夏の暑さとなった。一日早かった。きょうからは前線の活動が再び激しくなり、九州などは雨の予報となっている。

③ 芭蕉^{はしやう}が生きた時代とは異なつて、新暦のいまの七夕は、天気には恵まれぬものと相場が決まっている。気象庁によれば、2020年までの過去30年で、7日が「晴れ」だったのは東京で23%しかない。織姫と彦星^{ひこぼし}は年1度の再会を無事に果たせるのか。やきもきして当たり前なのである。

④ 芭蕉は、前夜から心待ちにしていたらしい。〈文月や六日も常の夜には似ず〉。『奥の細道』の長い道のりでは、暑さや雨に苦しんだ。旅を見まもる星たちは、対話を重ねる相手でもあったのだろう。

▶ (X)。ただ、しばらく大雨はこりごりの地域もある。これ以上の災害が起こらぬよう、櫂をこぐスピードを少々落としていただけると、ありがたい。

(朝日新聞 2023年7月7日「七夕」、承認番号(25-11115))

※朝日新聞社に無断で転載することを禁止する)

(次頁に続きます)

(1) それぞれの段落を正しく並べると、順序はどうなりますか。それぞれの位置に入る最も適当なものを、①～④のうちから一つずつ選びなさい (完全解答)。解答番号は 33 と 36。

▶最初の段落―(33) ―(34) ―(35) ―(36) ―▶最後の段落

(2) (×) に入る文として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選びなさい。解答番号は、37。

- ① 今夜、天の川にカササギの橋がかかる
- ② 早く会いたいと、はやる彦星の気持ちは分からぬではない
- ③ 芭蕉は雨の日の句も数多くよんでいる
- ④ 急いで進む彦星は、空に大粒の雨を降らす
- ⑤ 今年も、彦星は織姫との再会を断念することになるだろう

以上で問題は終わります。